

## 荒木徹君の思い出

徳田八郎衛（1961 電磁気）

### 1 思いやりと気配り

地球物理学教室同窓会（知球会）会長を務めた荒木君の経歴や人柄について、会員の皆さんが、ある程度の知見をお持ちという前提でこれを記します。彼が後輩や学生に親切で、面倒見が良かったことはよく知られていますが、同輩や先輩にも同様でした。親切というより思いやり、気配りというべきかもしれません。プライバシーが絡むので具体例は示せませんが、短気な私なら「もう知らんわ」と言いそうな状況に至っても、根気よく助言を続けていました。今でいうカウンセリングの達人といえます。

大きな組織には必ず総務・人事という機能・組織があります。これと喧嘩する人もいますが、私は申し分のない総務・人事のスタッフに支えられて勤務した果報者でした。それを荒木君に告げた際、付け加えたのが「君は教育者で研究者だけど総務・人事が務まるね」。彼の応えは「自然が好きでこの道へ進んだけど、大目標達成には総務・人事を知ってないと、そして出来ないアカンね」。そして戦前の講座開設以来、半世紀も幽霊講座だった地球電磁気学講座の予算定員化によりやがて成功したことを誇らしげに伝えました。「御目出とう。後任への最大の置き土産だ。荒木でないと出来なかった。君の銅像建てなアカン」。「すでに荒木寅三郎総長の胸像があるからいいよ」。

### 2 二人の共通点

2027年まで彼が生きていてくれたら一緒に入学70周年を迎えられたのですが、私のような我儘な男と、よくぞ70年近く付き合ってくれたものと何時も感謝しています。宿縁かもしれません。彼の本籍地は京都府の西丹波、天田郡（今の福知山市）の西北で、天橋立へ抜ける峠の手前、大江町。私の本籍地は兵庫県の西丹波、氷上郡（今の丹波市）の中央で、由良川と加古川の水源が接する柏原町。どちらも交通の要所。重責を担って庄屋を務めた先祖の古民家や古文書の管理や処理に悩むという共通点がありました。自分の専門とは違うが、文書の歴史的価値が理解できるものだから捨てられません。

私が「兵庫県に（旧制中学校の）名門校は沢山あれど、宰相を生んだのは我が校だけだ」と威張りだすと、彼が「その後輩が、量子力学で低空飛行しては先輩に申し訳ないやないか」と虐めにかかります。「京都府では丹波にも丹後にも中学校がすぐ設立されないで福知山の芦田均さんは我が校へ入学された。荒木も明治中期に生まれていたら我が校へ来ていたはずだ」と私も逆襲。亀岡や舞鶴の人とは違う親近感がありました。

結婚すると、更なる接点が生じます。御所の南に実家がある妻から「幼少の頃は等持院近くの古い屋敷に住んでいました。小学校は衣笠小学校へ」。「私たちの結婚式を8ミリで撮影してくれた荒木君という同期生、彼も衣笠だよ」。「学芸大付属中学の抽選に当たり市電に乗って通学しました」。「ア、あいつも付属だ」。「高校は山城高校で、サッカーの釜本君の隣へ」。「あいつも山城。何や、12年間も彼の後輩か」。

その頃の私は、九十九里浜の東端で電離層反射波を利用した超遠距離レーダーの実証実験に取り組んでいました。京大の工学部助手から理学部助手となった荒木君が「可能性はありそうか？」と見に来てくれた際、夕食に官舎へ連れて行くと家内との会話は弾みました。私の電離層研究新発見の話など聞いてもらえません。そして私も二人の会話から思い

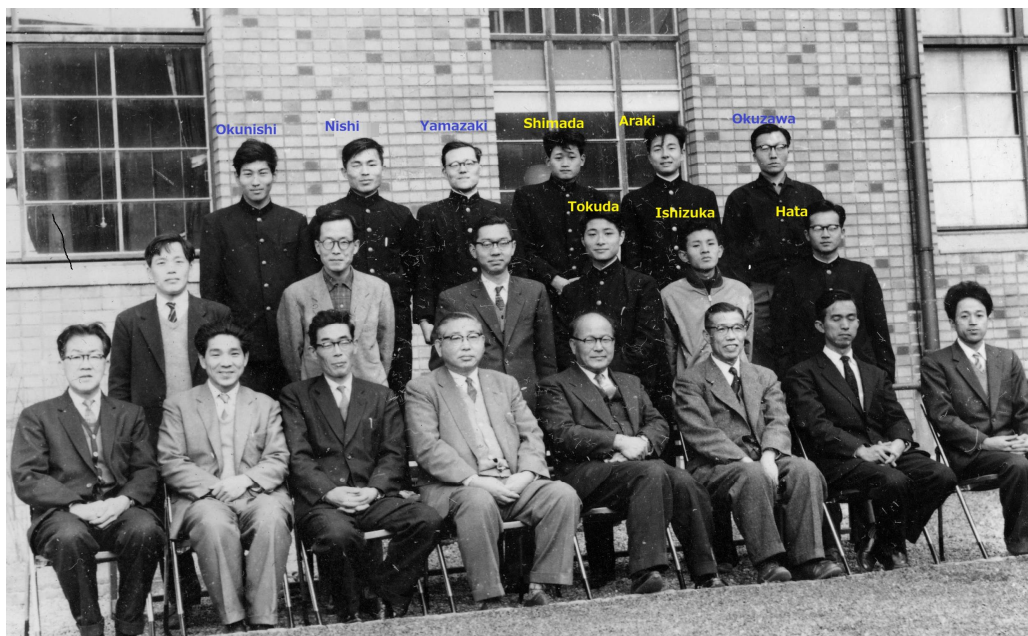
がけないことを学びました。白梅町、紅梅町、等持院界隈が、太秦の映画関係者の住む街なのは知っていたけど、著名な文士や画家が住む文化村でもあったことを。

### 3 学友でなく岳友

学部時代の荒木君との関係は、学友でなく岳友でした。まだ立山ドライブウェイがなく、立山ケーブルカーだけが完成したばかりの3回生の秋、エッチラオッチラ美女平を横切り、室堂で山小屋に泊り、恐ろしい岩場の剣岳へ登った時も、大山の痩せ尾根で木枯らしに吹き飛ばされそうになった時も一緒でした。神戸海洋気象台の海洋観測船で海洋調査実習を済ませ、高知で下船して石鎚山を南から北へ越えた時も・・・

晩年の彼の告白では、彼の身体は体育会向きではなく肺活量も少ないので高山の登攀は苦しかったとか。でも弱音は吐かなかった。そして彼の正確な地図判読には常に敬服しました。その才能を発揮したのが兵庫県の最高峰、氷ノ山（1510m）への春山登山です。クロコンスキーでなく長いゲレンデスキーを担いで鉢伏高原（今はハチ高原）から山頂へ。山頂で「さらばじゃ」と東西に別れ、私は登った道を滑り降り八鹿駅へ、彼は反対側の鳥取県斜面を確かめながら若桜町へ滑り降り、倉吉線（昭和60年廃線）に乗って倉吉市へ嫁いでいる長姉を訪ねます。登りで尾根や沢を間違えても何とか山頂と繋がりますが、下りで間違えると別の谷へ迷い込み大変なことになります。70年弱の付き合いで、荒木君を私が案じたのは、この時だけでした。

もう愛宕山登山も厳しくなった70代後半、山の記念日が設定され、「この日に死ねば周囲が命日を覚えてくれていいね」と二人で笑ったら、10年後、彼の訃報を百合子夫人の配慮で伝えて頂き、駆け付けた告別式の日は何と8月11日。「君逝けど今日も雲湧く剣岳」を霊前に供え、岳友の冥福を祈りました。（終り）



1961年3月、地球物理学科卒業生と教官（学生2名欠）



1959年10月、比良山系武奈岳無人小屋にて  
3回生の徳田（左）・荒木（右）